

知的障がい児・者及び発達障がい児・者等が在籍する柔道教室に関する調査

－インクルーシブな柔道教室の環境作りに向けて－

中村 太記 (和歌山大学)

1. 目的

本研究の目的は、障がい児・者が在籍する柔道教室の現状を把握する共に、これからの柔道教室のインクルーシブな指導に貢献する一資料を提供することである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：日本国内の知的障がい児・者や発達障がい児・者等が在籍する柔道教室のうち代表の指導者1名とした。
- 2) 調査方法：Web アンケート調査を行った。
- 3) 分析方法：分析項目に沿って、概観及び考察を行った。分析項目は以下のとおりである。
 - ①指導者の経歴に関する項目
 - ②柔道教室に関する項目
 - ③受け身の指導に関する項目
 - ④寝技の指導に関する項目
 - ⑤立技の指導に関する項目
 - ⑥障がい児・者への支援に関する項目
 - ⑦インクルーシブな柔道教室の環境作りに関する項目
 - ⑧指導者の考え方に関する項目 など

3. 結果と考察

- 1) 練習メニューについては、回答者から得た具体的な練習メニューの内容から、運動遊びを織り交ぜて、遊びの感覚で柔道の動きを身につけることや、動きやメニューを細分化して身につけることなどが大切であると考えられた。

また、障がい児・者が柔道を楽しむための工夫として、「笑顔で接する」、「やっている事を否定しない」、「出来たら褒める」など、指導者の関わり方に関する回答も見られた。
- 2) インクルーシブな柔道教室の環境作りについては、指導者の中には、練習生が障がい理解を深めるために、学びの時間を設け、違

いを認め合うことの大切さや強さは優しさであることを理解するようにと努めている指導者がいた。

- 3) 障がい児・者への柔道指導で重視する点については、「コミュニケーション能力を高めること」、「柔道を楽しむこと」、「精神的な成長」、「個性を伸ばす」など内面的な成長や柔道を楽しむことであることがわかった。また、「昇段・昇級すること」、「柔道の技術を高めること」、「試合で勝つこと」など障がい児・者に対して、結果を出すことや技術の上達を求めている指導者は少ないことがわかった。
- 4) 障がい児・者が柔道をする上での問題点については、幼児や障がい者を指導できるもしくは指導したい指導者が少ないこと、試合以外での評価の場が少ないこと、柔道への危険意識やその他の様々な問題があることを把握することができた。

4. 結論

本研究では、練習メニューの内容、安全面の配慮や柔道を楽しむための工夫、インクルーシブな柔道教室の環境を作るための実践、現在の障がい児・者が柔道を行う上での課題などが明らかになった。また、障がいのある練習生と定型発達の練習生が共に練習をすることが可能であることを確認することができた。

今後、勝つこと以外の柔道の価値が見出されるようになること、柔道が障がい児・者に良い影響を与える可能性があることの認知の広まり、インクルーシブな柔道教室の環境の整備によって、障がい児・者にとって柔道をするのがより身近なものとなっていくことが期待される。また、指導者自身も柔道教室に障がい児・者が在籍している場合に、柔道指導や関わりにおいて戸惑うことがなくなっていくことが予想される。